

2024年9月29日（日）「真理を掴む機会」

使徒 5:17-26

17 そこで、大祭司とその仲間たち、すなわち、そこにいたサドカイ派の人々は皆、妬みに燃えて立ち上がり、18 使徒たちを捕らえて公の牢に入れた。19 ところが、夜間に主の天使が牢の戸を開け、彼らを外に連れ出し、20 「行って神殿の境内に立ち、この命の言葉を残らず民衆に告げなさい」と言った。21 これを聞いた使徒たちは、夜明け頃、境内に入って教え始めた。一方、大祭司とその仲間が集まり、最高法院、すなわちイスラエルの子らの全長老会を召集し、使徒たちを引き出すために、人を牢に差し向けた。22 下役たちが行ってみると、使徒たちが牢にいないので、引き返して報告した。23 「牢にはしっかり鍵がかかっていたうえに、戸の前には番兵が立っていました。ところが、開けてみると、中には誰もいませんでした。」24 神殿の主管と祭司長たちは、この報告を聞くと、どうなることかと、使徒たちのことで思い惑った。25 その時、人が来て、「御覧ください。あなたがたが牢に入れた者たちが、境内にいて民衆に教えています」と告げた。26 そこで、神殿の主管は下役を率いて出て行き、使徒たちを引いて来た。しかし、民衆に石を投げつけられるのを恐れて、手荒なことはしなかった。

【序論】

今年の聖霊降臨日（ペンテコステ）は5月19日でしたが、ウェルカムサンデーと重なったため日を改めることにいたしました。四ヶ月遅れではありますが、今日は使徒言行録から語らせていただきます。使徒言行録（使徒行伝）は「聖霊業伝」とも呼ばれ、主イエスの弟子たちを通して聖霊がなさった御業を描いている書です。その著しい御業を見た人々の反応は大きく二つに分かれます。癒されて信じた人々がいたのに対し、妬みと怒りに燃えて敵対した人々もいたということが繰り返し記されている。どうしてこうも異なる反応が生じるのか。神の素晴らしい御業を見てなぜ、怒ってしまうのか。なぜ使徒たちの働きを妨害するのか。今日は反対者たちの心理に迫りつつメッセージを聞き取っていきたいと思います。

【本論】

今日の箇所に入る前に、文脈を理解するため前回扱った部分を引用します。

ついに、人々は病人を大通りに運び出し、担架や床に寝かせ、ペテロが通りかかるとき、せめてその影だけでも誰かにかかるようにするほどになった。また、エルサレム付近の町からも、大勢の人が病人や汚れた霊に悩まされている人々を連れて集まって来たが、一人残らず癒やされた。（5:15-16）

ペテロを通して驚くべき癒しの奇跡が行なわれ、次々と病人が運ばれてきました。立派な宗教指導者たちにもできないことが、一介の漁師の手によって行なわれているのです。民衆の人氣が奪われた彼らは妬みに燃えました。

本論 1. 投獄

そこで、大祭司とその仲間たち、すなわち、そこにいたサドカイ派の人々は皆、妬みに燃えて立ち上がり、使徒たちを捕らえて公の牢に入れた。(5:17-18)

ここに登場する「サドカイ派」とはユダヤ人の貴族階級の人々で、裕福な家柄でした。お金によって宗教的地位を得ていたとも言える。日常生活の中で一番大切なのは神殿に行って献げ物をする事だと教えていました。この時期にローマ帝国によって公式に大祭司と認定されていたのはカヤパ(紀元 18-37 年)でしたが、ユダヤ人たちはカヤパの父アンナスを大祭司と認めていたようです。どちらの名前も新約聖書に出てきます。「その仲間たち」とは大祭司の家族のメンバーで、サドカイ派とは親しい間柄にありました。

さて、使徒たちを通してなされた著しい神の御業を見た彼らの反応に注目しましょう。多くの病人が癒やされるという喜ばしい状況にも拘らず、彼らは神を崇めるのではなく、かえって使徒たちを捕えて牢に入れました。ユダヤ教議会では、以前にイエスの御名で語ってはいけないという命令を使徒たちに下していましたが(4:17-21)、今回はそれを破ったわけでもなかったのです。病人が癒やされるというただただ喜ばしい状況が、彼らにとっては不愉快で仕方がなかった。それは、彼らには同じ力が具わっていないからであり、彼らが殺害したイエスの御名の權威が民衆に認められてしまうからでした。そして、彼らがイエスに対して行なったことの不当性が暴かれるのを恐れたからでしょう。彼らは自分たちの立場を守るために、イエスの証人を消さなくてはならなかったのです。

本論 2. 救出

ところが、夜間に主の天使が牢の戸を開け、彼らを外に連れ出し、「行って神殿の境内に立ち、この命の言葉を残らず民衆に告げなさい」と言った。これを聞いた使徒たちは、夜明け頃、境内に入って教え始めた。(5:19-21a)

言われのない罪によって投獄された使徒たちでしたが、神の介入によって救出されます。ここで使われている「天使」という言葉は原語では「ἄγγελος」であり、「使者」とも「天使」とも訳すことが可能です。仮に人間の使者であった場合、留置所の扉を開閉できる者の中に使徒たちの理解者がいて彼らを逃したという話になります。ですが、本書には頻繁に天使の超自然的な介入があるため(8:26、12:7-10、12:23)、おそらくここでも同様のことが起きたのでしょう。

ここで天使が使徒たちに命じている事柄に注目しますと、「命の言葉」すなわち「福音」「救い」を尚も宣べ伝えよと言っています。投獄されるという命の危機を経験したにも拘らず、救出されたその瞬間から再び「神殿の境内」という最も目立つ場所で大胆に語れと言われたのです。神殿の境内には多くの人が集まるだけでなく、神が福音宣教のためにイスラエルの中心地として選ばれたがゆえに、この場所に何度でも遣わされるのです。

使徒たちは直ちにこの命令に従っていますが、彼らの内にはもはや恐れが存在しないこ

とが分かります。自分たちの手を通して神が確かに働いておられることを知っていたからです。「**教え始めた**」とは、癒しの業とは異なり、明確な服従拒否を意味します。彼らは「人に聞き従う」より「神に聞き従う」方を選択したのです（4:19）。

本論 3. 騒ぎ

一方、大祭司とその仲間が集まり、最高法院、すなわちイスラエルの子らの全長老会を召集し、使徒たちを引き出すために、人を牢に差し向けた。下役たちが行ってみると、使徒たちが牢にいないので、引き返して報告した。「牢にはしっかり鍵がかかっていたうえに、戸の前には番兵が立っていました。ところが、開けてみると、中には誰もいませんでした。」（5:21b-23）話が面白くなってきます。真夜中の救出劇に全く気づかなかった権力者たちは、朝になって使徒たちを裁判にかけるため牢屋から連れ出そうとします。ところが、下役が行ってみるともぬけの殻になっていました。著者は暗黙裡にこの状況を楽しんでいるようです。人間の企みを嘲笑うかのように、神が活動しておられる。神の手にかかるとは、どんなに頑丈な錠も通用しない。見回りをしていた番兵も知り果せぬところでした。

神殿の主管と祭司長たちは、この報告を聞くと、どうなることかと、使徒たちのことで思い惑った。（5:24）

ここで、「**神殿の主管と祭司長たち**」が「**思い惑った**」と言われています。神殿の主管とは、祭司の家系で、大祭司に近い地位にある人でした。彼らは何を不安に思ったのでしょうか。投獄したはずの使徒たちが誰かの手によって逃がされたということで、責任が問われる可能性があったのでしょうか。そうかもしれません。しかし、私はむしろここに、彼らと共に神がおられることを認めざるを得なくなったことへの不安が生じたと理解しています。もし本当に使徒たちを通して神が著しい御業をなさっているのであれば、これまで自分たちが取ってきた行動は神に敵対するものであるということになるのです。もしかしたら自分たちは間違っているのではないか。そういう心の惑いが生じてきていたと考えられます。

さて、今日はこの「心の惑い」に注目しましょう。もし彼らが、自分たちのやっていることが間違いだということに気づいたのであれば、その後の行動には二つの選択肢が与えられることになります。第一に、これまで通り使徒たちへの迫害を続け、神に敵対する道を歩み続けること。第二に、これまでのあり方が間違っていることを認め、使徒たちが歩んでいる道に入ること。彼らにとって、これは神に立ち返るチャンスだったのです。

本論 4. 捕縛

その時、人が来て、「御覧ください。あなたがたが牢に入れた者たちが、境内にいて民衆に教えています」と告げた。そこで、神殿の主管は下役を率いて出て行き、使徒たちを引いて来た。しかし、民衆に石を投げつけられるのを恐れて、手荒なことはしなかった。（5:25-26）「夜明け頃」（21 節）から朝まで神殿の境内で教え続けていた使徒たちでしたが、その姿が

敵対者の目につくことは百も承知の上で堂々と活動していました。彼らは案の定、これはどうしたことかとやって来て、再び使徒たちを捕縛しました。さて、ここにやって来たのが、先に「思い惑った」「神殿の主管」であるという点に注目しましょう。彼らは結局、向きを変えて出発するチャンスをものにできなかったのです。目の前に真理が呈示されていながら、それを掴み取ることができなかった。彼らは、使徒たちの話を喜んで聞いていた民衆のことは恐れている。神を恐れるのではなく、人を恐れているのです。この姿勢は、使徒たちと正反対です。彼らはあくまでも自己保身のためにしか行動することができないのです。

【結論】

今日の箇所全体には、使徒たちに敵対する人々に対しても神は語りかけておられるという、一つのメッセージが込められているように思えます。神は幾度も真理を示し、それに応答する機会を与えてくださる。そのたびに、神の御業を目の当たりにする人々には、選択が迫られるのです。従来通りの道を歩むか、新しい神の道を歩むか。ここには、生き方を変えることのできなかった人々の残念な例が記録されています。しかし、福音書の中には、ユダヤ教の議員の中にも主イエスを信じた者がいたことも記録されています。ニコデモであり、アリマタヤのヨセフです。彼らは自らの立場が危険に晒されることを承知の上で、主イエスの葬りに向かいました。社会的地位を失うことを分かっているながら、真理に生きる道を選択したのです。

私たちが、地上における生き方において、神が示される道に従うかどうかの選択が迫られることがあります。それは、地上の生活においては何らかの不利益が生じることが少なくありません。しかし、それでも真理を掴み取るとき、私たちがかつて見たことのない新しい世界が開けてくるのです。神がその先に与えてくださる祝福を信じて、恐れを捨てて神に従いたいと思います。

【祈り】

真理を愛される天の父なる神様。主イエスの使徒たちは、人ではなく神を畏れて行動しました。そのようにまっすぐ生きるには、常に聖霊の助けがありました。私たちも地上の生涯を歩むとき、幾度も道を選択しなければならない場面に遭遇します。そのとき、祈りつつ神の真理の道を見出すことができるようお助けください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
福音のことばにより、すべての人に真理の道を示し給う、父なる神の愛、
ご自身に従う者に、大いなる神の御業を見せ給う、主イエス・キリストの恵み、
神を畏れるところに、あらゆる物事の判断基準を与え給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。